月刊みんぱく

2022年
12月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和4年12月1日発行 第46巻第12号通巻第543号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集 いわと人

いわと不死　樫永 真佐夫
いわの声を聴くべきとき　鎌田 東二
いわを見る　進士 五十八
生きているいわ　松本 雄一
いわが道具になるとき　市野 進一郎

月刊みんぱく
2022年
12月号

目次

1 エッセイ　千字文
宮沢賢治の見た「いわ」
加藤 碩一

特集
いわと人

2 **いわと不死**
樫永 真佐夫

4 **いわの声を聴くべきとき**
鎌田 東二

5 **いわを見る**
――いわと庭園
進士 五十八

7 **生きているいわ**
――インカ帝国の建築に見る「自然」
松本 雄一

8 **いわが道具になるとき**
――霊長類の生息環境から考える
市野 進一郎

10 みんぱく回遊
シンドバッドが日本にやって来た？
西尾 哲夫
岡本 尚子

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
朝鮮戦争と慶州
――画家が描いた仏頭を訪ねて
松岡 とも子

16 コレクションあれこれ
世界初の毛沢東バッジデータベース
韓 敏

18 シネ倶楽部 M
ジョージア北東部における牧人と山岳民の暮らし
――「トゥシェティの牧人」
久岡 加枝

20 ことばの迷い道
耳を怠けさせろ？
林 明仁

21 編集後記・次号の予告

表紙
マチュピチュ遺跡、太陽の神殿の基盤。
いわの裂け目に石積みがはめ込まれている
（撮影：関雄二、ペルー、2013年）

エッセイ
千字文

宮沢賢治の見た「いわ」

加藤 碩一

「いわ」と「ひと」は、密接に関わりあってきた。「磐・巌・岩・石・岩石・鉱物・鉱石・宝石・石材」に関する日本語の語彙の豊富さは世界に冠たる「いわ言葉文化」ともいえるほどである。近接する大小の岩塊を「夫婦岩」、垂直な壁のような岩を「屏風岩」、平らに広がる岩を「畳岩」、また、生物名に因む「象岩」「猫岩」「茸岩」「竹葉石」など枚挙に暇がないほどである。

かの宮沢賢治は、少年時に「石っこ賢さん」とあだ名されたほど石好きで、長じて盛岡高等農林学校に進学し地質学の専門的教育を受けた。また、野外調査でのちに「イーハトーブ」と呼んだ岩手県下の岩手山（火山岩）・種山ケ原（堆積岩）・早池峰山（蛇紋岩）など各地を巡り、地質図を作るとともにそれらは彼の作品世界の舞台ともなった。彼の作品には、鉱物名だけで七〇余り出てくる。また、ルビを活用して「いわ」の視覚的表現と聴覚的表現を組み合わせ、より豊かな独自の地学的表現を用いた。例えば、「藍銅鉱」「玉髄」「黄水晶」「土耳古玉」「天河石」「蛇紋岩」「流紋岩」「石英安山岩」「飛白岩」「砕塊熔岩」「捕虜岩」他である。

岩手県稗貫郡花巻町（当時）小舟渡付近の北上川沿岸部を賢治が「イギリス海岸」と命名したといわれる。そこに分布する泥岩（マッドストーン）の地質時代は、当時は第三紀（ターシャリー）鮮新世（プリオシン）と考えられており、賢治作詞の「イギリス海岸の歌」にも、それらの地質学用語が英語表記で用いられている。従来、「イギリス海岸」は、ドーバー海峡の崖を連想したためとされていたが、実は地形地質学的には両者はまったく異なる。むしろテームズ河上流の風景写真に触発され、また、両者に共通する水際に近いという地理的位置関係や付近に分布する岩石の白っぽい色などいくつかのイメージを複合して命名したものであろう。さらに、童話『銀河鉄道の夜』に「七　北十字とプリオシン海岸」としても登場する。もとより「いわ」の楽しみ方は人それぞれだが、ある程度の地質学的知識がある方が、こうした「いわ」をよりよく理解でき、より深く楽しめるのではないかと思われる。また、作品世界と現実世界の「いわ」とは、必ずしも厳密に一致するわけではなく、またその必要もないが、誤読は避けるべきである。賢治作品は、近年、新たな文理融合研究分野として成立しつつある「文化地質学」の絶好のテーマでもあり、今後さらに新たな評釈が期待される。

なお、賢治が採集した標本類が「岩手大学農業教育資料館（旧盛岡高等農林学校本館）」（盛岡市）にあり、ほかにも「宮沢賢治記念館」（花巻市）や「石と賢治のミュージアム」（一関市）で、関わりのある鉱物・岩石標本類が展示されていることを付記しておく。

プロフィール
1947年横浜市生まれ。産業技術総合研究所名誉リサーチャー。幼いころから「いわ」に興味をもち、地質学を専攻し、国内外で地質調査に勤しんだ。著書に『地震と活断層の科学』（朝倉書店、1989年）、『宮澤賢治の地的世界』（愛智出版、2006年、第17回宮沢賢治賞奨励賞）、『賢治と鉱物』（共著、工作舎、2011年）、『日本列島地質総覧』（共編著、朝倉書店、2022年）他。

特集 いわと人

自然環境の未来に対する危惧が高まっている。いわは生命誕生以前からの元祖「自然」である。にもかかわらず、水、空気、森などに対して脇役か、むしろ悪者だ。そんないわについて、「文化」の視点からとりあげよう。

播磨国の山あいにある岩上神社は、かつて光を発していた磐座を御神体とし、オオカミを神の使いとする。耕牛の守護、疫病よけの崇敬が厚かった（兵庫県宍粟市、2022年）
©Masao Kashinaga

いわと不死

樫永 真佐夫
民博 超域フィールド科学研究部

死の起源

『古事記』にこんな話がある。

高天原から天下ったニニギノミコトは、麗しい少女に出会った。名をきくとコノハナサクヤヒメ。「結婚しない?」と、いきなりの告白に彼女はこう返事した。

「お父さんが『うん』と言ったらね」

父オオヤマツミは申し出に大喜び。持参の品々のほか、姉のイワナガヒメというおまけつきでコノハナサクヤヒメがおよめに来た。だが姉はブサイクすぎた。だから彼女にだけはお引き取りいただいた。

すると、オオヤマツミが恥じながら申し上げた。

「イワナガヒメをおくったのは、あなたさまの命がいわのように永く不動であらんがため。しかし、コノハナサクヤヒメだけをそばに置いたことで、あなたさまの命はこのはなのようにもろいものとなるでしょう」

この神話からは、はなといわ、美と醜、生物と物体、生命と不死、つかの間と永遠、もろさと堅さ、可変と不変、動と不動、といった二項対立を読みとることができる。ニニギノミコトが不死、不変、不動のいわを手放し、はかないはなの美を選んだがために、人はそれらを手に入れることができなかった。

だが人は欲深い。なんとかして美、強さ、繁栄を手に入れ、それらを増やし、永続させようとしてきた。そんな現実を踏まえると、この神話は人の死の起源のみならず、欲の起源をも説いている気がする。さらには、このはかなくもろい運命に対し、飽くなき抵抗をしめしてきた人の欲深さこそが、文明を発展させてきたとも思い至る。

アンコールワットの回廊にある石彫像（カンボジア、シェムリアップ、2001年）

いわ離れの現代

お気づきのように、この特集では「いわ」をひらがなにしている。このことばには岩、石、巌、磐など、さまざまな漢字を当てることができるが、意味範囲は同じではない。ここでは地質学的にというより人を中心に話を展開したいし、テーマを狭めすぎたくないので、あえてひらがなにした。

いわは、人にとってとてつもなく大きくもあり、小さくもある。このことは、一九二〇年代の山梨における子どもの石合戦の記憶を発端に、文化としてのつぶての解明に挑んだ中沢厚が『つぶて』（法政大学出版局、一九八一年）ですでに示している。ガリレオ的観点では地球そのものが一個の磁石であり宇宙に投ぜられたつぶてにすぎない。そのいっぽう、人は太古のむかしよりいわを片手でさえもてあそんできたのである。

人はいわなしに存在しえず、いわなしに文化も文明もなかったのである。にもかかわらず、現代の都市生活でいわを意識することは少ない。長い歴史のなかで、いわに依り、いわを祀り、いわを用い、いわを放り、いわを壊し、いわをつくり、いわを凌駕しようとしてきた人は、いっぽうで宇宙ロケットを持ち出すまでもなく、いわから離れようとさえしてきた。

だが、人にどこまでいわ離れができるのだろうか。そんな問いも頭の片隅におきながら、まずは、いわを文化史的に考えてみよう。この特集では、いわに対する信仰、いわを賞翫する思想とその表現、都市のいわに見る「自然」、環境への適応といわの利用、といった観点からいわへ多面的にアプローチしている。

すると、すぐに気づく。本稿冒頭のイワナガヒメをめぐる神話にある、永遠に変わらずブサイクな物体というイメージを、いわははるかに超えているのである。むしろ、ときに美しく、感情的で、生命力がみなぎっている。

いわにこのような生命を与えたのは、原初にいわに生命を与えられた側の人である。欲が人を「いわ」化させるに応じて、いわも「人」化しているのである。

上：黒タイ始祖の依り代となる磐座だが、東南アジア大陸部に磐座信仰はそれほど多くない（ベトナム、ギアロ、2000年）
左：20世紀初頭に黒タイの首領一族がたてた廟の石柱。黒タイ文字が縦に刻まれているのは、中国の碑文の伝統の土着化の証（ベトナム、ソンラー省、2007年）

イラストマップ全体は右のURLで https://www.minpaku.ac.jp/research/publication/column/gekkan/media/2022-12

いわの声を聴くべきとき

鎌田東二　京都大学名誉教授

言問う石根

みなさんは、石や岩の声を聴いたことがおありだろうか？

古代の日本人は「いわ」（古語では「いは」と表記）が言葉を発していたと考えていた。その証拠に、「常陸国風土記」（『日本古典文学大系二 風土記』岩波書店、一九五八年）には、「荒ぶる神等、又、石根・木立・草の片葉も辞語ひて」とあって、「石根」や「木立」や「草の片葉」が「ことと い（言問い）」していたとしるしている。

この表現法や章句は長らく定型表現を成していたようで、平安中期に編纂された「延喜式祝詞」（『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』岩波書店、一九五八年）のなかには、「事問ひし磐ね木の立ち、草の片葉をも言止めて」（大殿祭祝詞）、「語問ひし磐ね樹の立・草の片葉も語止めて」（大祓詞・遷却崇神祝詞）という言葉が定型的に使われている。つまり、巨大な稲をもつ岩（磐・巌）も、草木も、みな当初は「言問い」をしていたのだが、その声は新しく入植してきた者たちによって「言向け和」されて、「言問い」をすることがなくなったというのである。

同じく延喜式祝詞のなかの「出雲国造神賀詞」には、「豊葦原の水穂の国は、昼は五月蠅なす水沸き、夜は火瓮なす光く神あり、石ね・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる国なり」とあって、この列島は、水が湧き溢れ、火山が噴火し、自然のさまざまな物象が言葉を発している「荒ぶる国」であるという。それほど自然の発動が激しくダイナミックであったということを示している。

これらの表記を見ると、『古事記』や『延喜式』を編纂していた八世紀初頭から一〇世紀にかけて、「いわ」の語りが畏れと敬いをもって受け取られていたことが見えてくる。そしてそれは、おそらく人類史のはるか太古の旧石器時代からの感覚の名残で、縄文時代や平安時代もすっ飛ばして、現代のわたしたちの心の深部にも生き残っていると思われる。

その証拠に、宮沢賢治は『注文の多い料理店』のなかの「狼森と笊森、盗森」（『校本 宮澤賢治全集』第十一巻、筑摩書房、一九七四年）で、次のように「巌」の語りをしるしている。

「小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森で、その次が笊森、次は黒坂森、北のはづれは盗森です。／この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巌が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました」

「しかしその粟餅も、時節がら、ずゐぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな巨きな巌がおしまひに云つてゐました」

「巨石ハンター」「石の語り部」として各地で活躍する写真家、須田郡司氏が撮影した石峰山の神籬（ひもろぎ）（宮城県石巻市、2011年）

「ボクを吹いて！」

かくいうわたしは、毎朝比叡山に向かって一〇種類ほどの「石笛」を奉奏しているので、石が語ることは身に染みてよくわかっている。どこに行くにも肌身離さずもち歩く石笛はアイルランドのアラン島で祈りを捧げた後、海岸線を歩いていたときに、わたしに向かって、「ボクを吹いて！」と呼びかけてきたのだから、間違いはない。わが心はその「聲」をしかと記憶し、わが身体はその「聲＝波動」をしかと記録している。

スタンリー・キューブリックは不朽のSF映画の名作「二〇〇一年宇宙の旅」（一九六八年製作）のなかで、サルからヒトへの進化を促す、時空を超える不思議な巨石「モノリス」を登場させたが、改めて今、その宇宙モノリスや地球モノリスの「いわ」の声をしっかりと聴くべきときが到来したと思う。そして、その声に適切に応答できなければ、人類の未来はないと思われてならない。

上：わが三種の神器（石笛・横笛・法螺貝）
下：福島県飯館村　虎捕山山頂
大山祇神社奥宮の拝所で法螺貝を奉奏する筆者
（撮影：須田郡司、2021年）

いわを見る——いわと庭園

進士五十八　東京農業大学名誉教授

重森三玲作、昭和の名庭　東福寺本坊庭園（京都府）

石の永遠性

庭は、建物の前の敷砂などドライエリア。園は、果樹など植物が植栽されている緑地。

英語のガーデン（garden）は、防犯の意のガン（gan,gun）と悦びの意のエデン（eden）の合成語で、安全で快適な「生きられる景観」（J・アップルトン）とされる。理想都市をガーデンシティとよぶのがそれで、きわめて人間的である。

必ず死を迎える人間は不老不死を願う。不死・永遠性の象徴が岩石。それも巨大な立石に古代日本人は神が宿ると感じて注連縄をめぐらし、天津磐座、天津磐境とよんだ。

磐座はアニミズムによる巨石信仰だが、日本庭園は世界の庭園様式とちがって、自然石をそのまま活用する。「石を立てる」ことを「作庭」と同義に使うほど日本庭園の骨格的構成は、「石組」とされている。例えば、真中に背の高い立石、両

松濤園（立花氏庭園）（福岡県）

脇にそれより低い石を、左右に高さを違えて、阿弥陀三尊、釈迦三尊、薬師三尊の仏に見立てる。これを「三尊石組」とよぶ。このとき石はかなり土中深く埋め、いかにも大地の底から隆起したかのように見せ自然の強さを感じさせる。

職人らは、三分の二は埋めよといっている。およそ日本人なら、自然石には霊性や仏性が宿ると感じ、石組に腰をかけるような事はしない。

上：常栄寺雪舟庭（山口県）
下：秋吉台（山口県）

象徴化

中国古代、道教や神仙思想では、東海の海中には人間が近づけない蓬莱島や方丈、瀛洲、壺梁島の四神仙島があり、そこには不老不死の薬（徐福伝説では、天台烏薬というクスノキ科の植物）があり、仙人がすむとされる。同様に古代インドの宇宙観が仏教に影響した須弥山思想がある。世界は、九山八海でできていてその中心のひときわ高い山が須弥山（シュメール、妙高山）で帝釈天がおられる。鎌倉臨済禅の感性表現として、昭和の作庭家重森三玲が設計した京都の東福寺本坊庭園には須弥山と蓬莱世界のダイナミックな構成が見られる。重森のは象徴的表現だが、写実的表現も自然石の使い方次第でいろいろ。

山口県の常栄寺雪舟庭は画聖雪舟作とされるが、わたしの見解ではカルストで知られる秋吉台をヒントにした写実的石組であるし、明治末期作の立花家松濤園（福岡県柳川）は、池中に自然石を多数配置して奥州松島を見立てた縮景庭園である。

また、大自然を見立てるための自然石の使い方でも、龍安寺石庭のように「象徴式」、妙心寺退蔵院の狩野元信の庭のように「写意式」、大徳寺大仙院のような「写景式」と多様な手法が使われている。もちろん日本庭園でも切石を用いた石橋も少なくないし、重さを軽く見せる面取り等の工夫も見られる。

兼六園黄門橋（石川県）

生きているいわ
――インカ帝国の建築に見る「自然」

松本 雄一　民博 人類文明誌研究部

いわという状態

新大陸最大の帝国として知られる南米のインカ（一四三八～一五三二年）において、いわは必ずしも永久に変化しない無機物ではなかった。それどころかある種のいわは、「生きている」ものだったのだ。このことを示す代表的な事例をふたつ挙げてみよう。

ひとつ目はインカの起源神話として知られるもので、インカの初代皇帝マンコ・カパックの兄弟であるアヤル・カチとアヤル・ウチュが旅の途中でいわとなり、彼らのことばに従ったマンコ・カパックによってその近くに首都クスコが建設されたというものである。この神話は、いわが彫刻のようなかたちで何かを表象するのではなく、いわという状態になった存在そのものであることを示している。

もうひとつの事例は、インカがまさに帝国へと向かう転換点として語られる、チャンカ族との戦争をめぐる伝承である。首都クスコに攻勢をかけるチャンカ族に対して、八代皇帝ビラコチャはクスコから逃げ出したが、その息子クシ・ユパンキは数で圧倒的に上回るチャンカ軍を相手に立ち向かいこれを撃退する。その際にいわが兵士となってインカ軍に味方し、戦の後にまたいわに戻ったという。この伝承は、いわが必ずし

マチュピチュ遺跡の太陽の神殿。
精緻な石積みの壁が周りを囲み、露頭を他から際立たせている
（撮影：関雄二、ペルー、2013年）

ポマコチャ遺跡。自然のいわの形に合わせて造られた石積み（撮影：ジェイソン・ネスビット、ペルー、2015年）

も静的かつ永続的なものではないことを示すものといえよう。

いわを接ぐ

このような考え方は、インカ帝国の建築からも読み取ることができる。有名なマチュピチュ遺跡には「太陽の神殿」とよばれる建物があり、美しい曲線を描く石壁が自然の露頭を囲むように造られている。我々の目から見ると単なる露頭にしか見えないいわの形状に合わせた形で美しい石積みが築かれ、何かの表象ではない特別な存在それ自体としてのいわを他から明確に区別している。太陽の神殿の基盤にはもうひとつ注目すべき点がある。花崗岩の露頭の裂け目に、強引にも見える方法で精緻な人工の石積みがはめ込まれているのだ（表紙写真）。

このような、自然の露頭と石積みが融合した建築もまた、インカではよく見られる。機能的な理由からでは説明がつかないこのような事例に関しては、米国の美術史家であるキャロリン・ディーンが興味深い考察を展開している。彼女によれば、自然石を組み込んだ建築は、起源となるいわから建築が育っていくという農耕や植物の生育と似通った過程を示しているのであり、建てる（building）ではなく接ぎ木する（grafting）こととみなすことができるという。自然としてのいわと文化としての建築というなじみ深い二分法はここではまったく通用しない。

インカ帝国を征服したスペイン人は、自然の地形やいわが聖なる場を意味するワカという名前でよばれることに困惑したようだ。自然と文化を対立させる西欧的な枠組みからは、両者の境界を前提としない、状態としての「生きているいわ」を理解することはできないからであろう。いっぽうで、インカ帝国の建築のなかに融合した「自然のいわ」は、我々が生きる世界とは異なる「いわが生きている世界」を垣間見せてくれる。インカの人びとは「生きているいわ」とともに生きていたのである。

いわが道具になるとき
——霊長類の生息環境から考える

市野進一郎
民博 人類基礎理論研究部

霊長類のナッツ割り

霊長類の「いわ」利用として、すぐに思いつくのは西アフリカのチンパンジーによるナッツ割りである。チンパンジーは一組の石をハンマーと台にして、硬いアブラヤシの種を割って、中身を食べる。あきらかに道具として「いわ」を利用している。この行動は、ヒトの道具使用の起源との関連から注目されている。

このような道具としての「いわ」利用は、ヒトに近縁の種に限らない。例えば南米に生息するオマキザルの仲間も、石を使って硬いナッツを割って中身を食べる。また、京都・嵐山のニホンザルは、地面にある小石を転がしたり、打ち鳴らしたりする。興味深いことにこのニホンザルの行動は、遊びとしての「いわ」利用と考えられている。

だが、結論を先取りすると、霊長類全体を見わたせば、「いわ」は利用する道具というより、むしろ利用する環境といっていい。霊長類は熱帯地域を中心に数多くの種が生息しているが、その「いわ」の利用は生息地域の環境の特性と密接に関連していると思われるからである。このことを、マダガスカル南部に生息するワオキツネザルの例から示そう。

マダガスカル南部にすむワオキツネザル

まず、ワオキツネザルが多く生息するマダガスカル南部の半乾燥地域は、総じて平坦な土地で、岩も石もほとんど見かけることがない。そのため、そこに生息しているワオキツネザルでは、「いわ」利用がそもそも生じることがない。

次に、そこから北に向かうとあらわれる、水田と岩山という対照的な景観からなる中央高地南部の例を述べよう。この地域のワオキツネザルは群れで岩山を移動し、岩の上で日光浴をし、お互いに毛づくろいをする。日当たりのよい岩場は見通しがよく、安全で快適な社交の場として利用されるのである。

さらに石灰岩の崖や洞窟がある島の南西部に行くと、ワオキツネザルがそういった岩場を泊まり場として利用している。このように、岩場を捕食者から身を守る避難場所や泊まり場とする行動は、ワオキツネザルに限らず、他の多くの種の霊長類のあいだでも見られる。

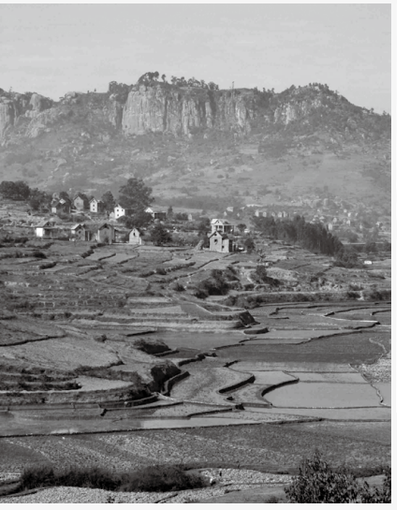
「いわ」のある環境

ただし、このような「いわ」利用が生じるのは、「いわ」自体の価値が見いだされているというよりは、「いわ」のある環境を利用した結果のようにも思える。中央高地から南西にあるイサロ国立公園では、強い日差しを遮るものがない草原を延々と歩いた後に涼しい岩場があらわれる。岩に囲まれた谷は水に恵まれているのか、ワオキツネザルの食物となる植物が多く生育している。ワオキツネザルの例ではないが、マダガスカル西部では、乾季に川の水がほとんど干上がった後に、岩場の穴に溜まった水を飲みにアカビタイキツネザルが集まることも知られている。

これらの例は、「いわ」のある環境がワオキツネザルにとって重要な資源の場所である可能性を示している。霊長類の「いわ」の利用については、「いわ」のある環境における生活との関連から知る必要がある。

岩の上で毛づくろいをするワオキツネザル。お互いに相手の体をなめたり、歯を使って毛をすいたりする
（撮影：栗林愛、アンジャ・コミュニティ保護区、2006年）

※Mittermeier et al.(2006) *Lemurs of Madagascar* (Second Edition)をもとに作成



上：水を飲むワオキツネザル。長い乾季を乗り切るためには食物と水が必要である
（撮影：栗林愛、ベレンティ保護区、2009年）
左：マダガスカル中央高地南部の景観。岩山が多く、その周辺には棚田が見られる
（撮影：栗林愛、フィアナランツゥア近郊、2006年）

みんぱく回遊

シンドバッドが日本にやって来た？

西尾哲夫
民博グローバル現象研究部
岡本尚子
民博グローバル地中海地域研究拠点

シンドバッド航海記の新訳を準備している。通説では、アントワーヌ・ガランが一八世紀初頭に仏訳した『千一夜』のなかのものがいちばん古くて、それをもとにした児童文学や映画、アニメが巷間に広まっている（『ガラン版千一夜物語』第二巻、西尾哲夫訳、岩波書店を参照）。ちなみにシンドバッドの歌といえば、ピンク・レディーの「渚のシンドバッド」とサザンオールスターズの「勝手にシンドバッド」がすぐに浮かぶ。どちらのシンドバッドも、なんとも軽薄そうな色男である。船乗りというと港々に女あり、などという月並みな連想かもしれない。旅の先々で危険な目にあうために、冒険譚として英語訳ではアドヴェンチャー、仏語訳ではアヴァンチュールなどが使われるが、後者の単語は日本語読者には別の想像をかきたてるかもしれない。

商人シンドバッド

だが本来のシンドバッドは船乗りというより商人、それも現代でいうところの貿易商人か商社マンに近い。彼の口癖は「わたしほど苦難をあじわい、危ない橋をわたった人の話を聞いたことがありますか？」で、毎回判で押したように船は難破するし、大蛇や巨人に出あっては難を切り抜けて、最後には巨万の富を得る。シンドバッド航海記の舞台は、八世紀から一三世紀ごろのアッバース朝期のペルシア湾からインド洋、そして東南アジアに至る広大な海域世界である。イスラームの預言者ムハンマドが世に生を受けたころを境に、交易網は陸路から海路、つまり陸のシルクロードから海のシルクロードへと徐々に代わっていく。その海域世界を生きていた実際の船乗りたちの経験談をもとにして生まれたのが、シンドバッド航海記にほかならない。

ところで、ガラン版よりもかなり古い版が最近になっていくつも発見された。じつはガランと同時代人のペティス・ド・ラ・クロワが、ガランよりも先に仏訳していることもわかった。それを読むと、ムスリムの伝承によるガラン版とは趣の異なるキリスト教徒の伝承によるもので、シンドバッド航海記のもとになった船乗りたちの航海実用書や地理案内書とでもいえる内容を残している。船乗りたちのあいだでの決まり事や船上での暮らしぶりがわかる記述もある。もちろん、島と見間違えるような大魚（クジラ）、人喰い巨人や大蛇、それに不思議な森の老人なども登場するが、インドや東南アジアに暮らす人びとやそこの動植物などに関する博物誌的あるいは民族誌的な情報も満載なのである。

アラブ世界研究所（パリ）のシンドバッド展。シンドバッドはこのようなダウ船に乗ってインド洋を航海した（撮影：岡本尚子、フランス、2016年）

島だと思っていたのはクジラの背中だった（レオン・カレ画、F200100123）
（出典：*Le livre des mille nuits et une nuit.* Traduction littérale et complète du texte arabe par le docteur J.-C. Mardrus ; illustrations de Léon Carré, Paris : H. Piazza, 1926-32）

Fからはじまる番号は本館の文献図書資料番号です。

実用書から冒険譚へ

では、シンドバッドといっしょに船出してみよう。遊び暮らして遺産を使いはたした青年シンドバッドは一念発起してバスラから船出した。島と思って上陸した先がクジラの背中だったため、海に放り出されて漂流してしまう。ガラン版では「焚き火をするために船から持ち出していた木切れ」につかまってとあるが、ド・ラ・クロワ版では「洗濯用の木片」とある。船上でどのように洗濯していたのであろうかがすこしわかる。またド・ラ・クロワ版では、インドのカースト制度に関してかなり詳細に記述されている。イスラーム地理書（例えば、イブン・ホルダーズベ『諸道と諸国の書』）の記述により近く、シンドバッド航海記が成立するなかで参照したであろう情報源のオリジナルな記述からまだあまり変容していない段階にあるともいえる。

もうひとつ最高度に興味深いことをあげておこう。ド・ラ・クロワ版には、「日本（Japon）」という単語が登場する。いわく「紅海からだと東方の海の端にあるワクワク（ワークワーク）島は（中略）日本の島々の方角にあります」。今は否定されているが、「倭国」のなまりと考えられていたこともあるワクワクと日本が結び付けられた最初の例だと思われる。海を知る人たちにとっての実用的案内書から、街に暮らす人たちにとっての娯楽的冒険譚へと変わる過程からは、異域を移動することで集積していく情報がどのように人びとの世界観に影響を与えるかということが明らかになる。

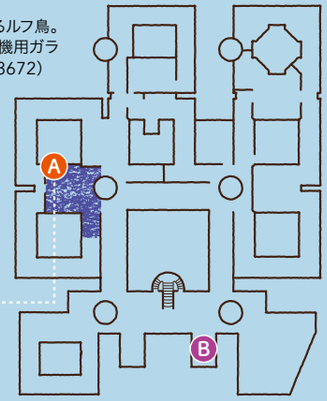
さてシンドバッドはわが日本にも来ていたのであろうか？

第二の航海に登場するルフ鳥。19世紀英国製の幻灯機用ガラス絵（イギリス、H0253672）

B 沈香や麝香、竜涎香などの香料を求めてシンドバッドは航海をした
（撮影：西尾哲夫、2022年）

A ココヤシ。第四の航海では人喰いの村でココナッツ油の料理を食べさせられる
（サモア、H0004850）

本館展示場



オセアニア展示
「島での暮らし」

みんぱくミュージアム・ショップ
本館１階

レユニオン島から見た夕暮れのインド洋とココヤシの木
（撮影：岡本尚子、レユニオン、2012年）

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

INFORMATION

みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内

https://www.minpaku.ac.jp/event

企画展

「海のくらしアート展 ――モノからみる東南アジアとオセアニア」

東南アジアやオセアニアの島や沿岸部に暮らしてきた人びとの漁具や船具、儀礼具や装飾品にみられる海との関わりを、そのアート（美術）性にも注目しつつ紹介します。

会期　12月13日（火）まで
会場　本館企画展示場

みんぱく映画会

第53回みんぱくワールド・シネマ「ハニーランド 永遠の谷」

日時　2023年1月14日（土）
13時30分～15時45分（13時開場）
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）（定員350名）
司会　菅瀬晶子（本館 准教授）
解説　池谷和信（本館 教授）

※事前申込制（本人を含む2名まで）、先着順、参加無料（要展示観覧券）
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会先行予約
12月5日（月）～9日（金）
定員70名
【申込先】
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
■一般受付　12月12日（月）～2023年1月6日（金）

みんぱく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから4つの作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。

参加形式
①会場参加　シアターセブン（大阪・十三）（各回定員45名）
②オンライン（ライブ配信）参加（各回定員100名）
※館外での開催です。
※事前申込制（本人を含む2名まで）、先着順、参加無料

「それでも獅子は旅を続ける――山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌」

日時　2023年1月22日（日）
13時30分～16時（13時開場）
解説　神野知恵（本館 特任助教）
山中由里子（本館 教授）
杉浦康博・斎藤晋（伊勢大神楽講社 山本源太夫社中）
司会　黒田賢治（本館 助教）

「マレーシア クランタンの影絵人形芝居」

日時　2023年1月28日（土）
14時～16時（13時30分開場）
解説　福岡正太（本館 教授）
戸加里康子（東京外国語大学非常勤講師）
司会　黒田賢治（本館 助教）

【申込期間】
■友の会先行受付
12月12日（月）～16日（金）
定員各回9名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
■一般受付　12月19日（月）～2023年1月13日（金）

「漢族の祖先祭祀と祖廟」

日時　2023年2月5日（日）
14時～16時（13時30分開場）
解説　韓敏（本館 教授）
司会　黒田賢治（本館 助教）

「オアシス都市のくらし」

日時　2023年2月11日（土・祝）
13時30分～16時（13時開場）
解説　寺村裕史（本館 准教授）
司会　黒田賢治（本館 助教）

【申込期間】
■友の会先行受付
12月19日（月）～23日（金）
定員各回9名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
■一般受付　12月26日（月）～2023年1月27日（金）

人間文化研究機構プロジェクト関連国際シンポジウム

「地域文化と博物館」

第1部
「地域文化の保存と活用――博物館の視点から」

日時　12月16日（金）
13時30分～16時40分
趣旨解説　日高真吾（本館 教授）
発表者　小谷竜介（国立文化財機構文化財防災センター）
井上舞（本館 プロジェクト研究員）
武知邦博（枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館）
総合討論
コーディネーター　川村清志（国立歴史民俗博物館 准教授）
パネラー　小谷竜介、井上舞、武知邦博
総合司会　末森薫（本館 准教授）

第2部
「市民参画型博物館の可能性」

日時　12月17日（土）
10時30分～16時10分
趣旨解説　日高真吾（本館 教授）
基調講演　陳倩慧（桃園市立大溪木藝生態博物館 館長）
黄貞燕（国立台北藝術大学博物館研究所 所長）
発表者　邱君妮（東京文化財研究所）
吳敏惠（社頭文化計画の主宰）
張柏宥（元桃園市立大溪木藝生態博物館 館員）
総合討論
コーディネーター　野林厚志（本館 教授）
パネラー　陳倩慧、黄貞燕、邱君妮、吳敏惠、張柏宥
総合司会　和高智美（合同会社文化創造巧芸）

※各回ともにオンライン（ライブ配信）での参加となります（定員450名）。

【申込期間】 12月14日（水）まで
主催　国立民族学博物館、桃園市立大溪木藝生態博物館（台湾）
※事前申込制、先着順、参加無料
お問い合わせ先
国際シンポジウム「地域文化と博物館」事務局　hidakakikan4@gmail.com

ワークショップ

年末年始イベント

「みんぱく うさぎさがし」

みんぱくの新しいワークシート「アクティビティ・カード」を使いながら、展示場にいる2023年の干支である「うさぎ」を探します。参加者には参加賞を贈呈します。

日時　12月25日（日）、2023年1月7日（土）、8日（日）
10時～17時（16時受付終了、配布予定数がなくなり次第終了）
受付場所　本館展示場
会場　本館エントランスホール
※当日随時受付、各日先着100名、参加無料

巡回展

国立民族学博物館コレクション

「ビーズ――つなぐ かざる みせる」

会期　2023年1月15日（日）まで
会場　渋谷区立松濤美術館
開場時間　午前10時～午後6時

（入館は閉館時刻の30分前まで、毎週金曜日は夜8時まで開館）
休館日　月曜日（ただし1月9日は除く）、12月29日（木）～2023年1月3日（火）、10日（火）
主催　渋谷区立松濤美術館
国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団

休館日のお知らせ

年末年始は12月28日（水）から2023年1月4日（水）まで休館します。年始は1月5日（木）から開館します。

訃報　小山修三名誉教授

本館の小山（こやましゅうぞう）修三名誉教授（83歳）がさる10月26日に逝去されました。民族学、考古学がご専門で、オーストラリアのアボリジニ研究、青森市の三内丸山遺跡の調査研究で、『狩人の大地――オーストラリア・アボリジニの世界』や『縄文時代――コンピュータ考古学による復元』等多くの著書を発表されました。本館には1976年に助教授として着任され、アボリジニ関連の資料を数多く収集されました。2002年に退職後は、吹田市立博物館長として、民博の所在する吹田市の文化振興にも貢献されました。また、千里文化財団の理事長も務められ、本館の支援活動にご尽力いただきました。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）
※定員400名
※事前申込制（先着順）、参加無料
・当日参加受付あり（定員80名）

第528回
12月17日（土）13時30分～15時（13時開場）
神殿をつくることから生まれた文明――古代アンデスの祭祀建造物
講師　松本雄一（本館 准教授）

【申込期間】
■ 一般受付
12月14日（水）まで
※友の会先行受付は終了しました。

第529回
2023年1月21日（土）
13時30分～15時（13時開場）
アラビアンナイトとヨーロッパの音楽風景
講師　西尾哲夫（本館 教授）
岡本祥子（ピアニスト）
岡本尚子（本館 特任助教）

18世紀に仏語訳されたアラビアンナイトは世界文学となり、芸術の源泉ともなってきました。異文化との遭遇が生んだヨーロッパの音楽風景から、他者との共感を共創していくことについて考えます。

【申込期間】
■友の会先行予約
12月12日（月）～16日（金）（定員80名）
【申込先】
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
■一般受付
12月19日（月）～2023年1月18日（水）

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

本館の研究者が「みんぱくの展示資料」「調査している地域（国）の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

会場　第5セミナー室（定員42名）
※申込不要（当日先着順）、参加無料（要展示観覧券）、14時より整理券配布
※開始30分前に開場

12月11日（日）14時30分～15時15分
マダガスカルの霊長類と人
話者　市野進一郎（本館 特任助教）

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加費　友の会会員：無料
一般：500円（会場参加のみ）
※オンライン聴講ならびに会員以外の方のご参加には事前申込が必要です。

第531回　12月3日（土）13時30分～15時
分断された商世界をつなぐ「ローカル・インフルエンサー」――タンザニアにおける商人のソーシャルメディアの利用とビジネスの未来
講師　小川さやか（立命館大学 教授）
参加形式
①本館第5セミナー室（定員96名）
②オンライン配信

第532回　2023年1月7日（土）
13時30分～15時
フランスのモン農民と考える「自由」
講師　中川理（本館 准教授）
会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※オンライン配信はありません。

ラオスから難民としてフランスにやって来たモン（Hmong）の農民たちと付き合っていると、彼らの「自由」へのこだわりに驚かされます。しかし、どうやら彼らにとっての「自由」は、私たちの考える「自由」とはどこか違っているようです。この講演会では、モンの生き方をとおして、「自由」のとらえ方を見直してみたいと思います。

東京講演会

参加費　友の会会員：無料、一般：500円
※ご参加には事前申込が必要です。
※オンライン配信はありません。

第131回　2023年1月28日（土）
13時30分～15時
古代エジプト文明の新たな研究拠点――大エジプト博物館への日本の支援
講師　末森薫（本館 准教授）
会場　JICA地球ひろば セミナールーム600（東京都新宿区市谷本村町10-5）
定員　40名

ギザの三大ピラミッドの近くに、古代エジプト文明の新たな研究拠点「大エジプト博物館」が建設中です。建物は完成目前であり、多くの来館者を迎えるべく展示の準備などが進められています。世界最大規模の博物館の建設にあたって、日本は資金援助だけでなく、人材育成や技術支援を進めてきました。その背景や成果をお話しします。

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

朝鮮戦争と慶州
――画家が描いた仏頭を訪ねて

松岡（まつおか）とも子（こ）
民博 外来研究員

朝鮮戦争期に描かれた仏像の絵

わたしはこれまで、金煥基（キムファンギ）（一九一三～一九七四年）という韓国人画家の朝鮮戦争期の活動を調査してきた。朝鮮半島における南北分断と朝鮮戦争の惨禍は筆舌に尽くし難く、芸術史においてもまさに半身をもがれるような出来事であったといえる。金煥基もまた失意のなかでソウルから臨時首都・釜山（プサン）に避難し制作を続けており、わたしはこの時期に彼がどのように絵画制作と向き合ってきたのかを資料調査と現地踏査から考えてきた。

現存作品からの判断ではあるが、金煥基は朝鮮戦争期にのみ仏像の絵を描いている。普段の制作に結び付かないモチーフであり、なぜ描かれたのか、これまでの研究において詳しく言及されてはこなかった。油彩画は仏の顔の部分だけをデフォルメし描いたものばかりで、《石窟庵（ソックラム）の印象》という慶尚北道（キョンサンブクド）・慶州（キョンジュ）の寺社を示すタイトルの作品が一点あった。また顎の下部が損傷し顔の左側が縦にひび割れた仏頭を描いたドローイングがあり、これは特定の仏像を写生したものであり、かつ顔だけが描かれた油彩画の原案になったものではないかと推測できた。

これをヒントにさまざまな方向から資料を探してみると、日本統治期に慶州で撮影された写真のなかに同じ仏頭があり、これが当時から知られた存在であったこと、そして現在は国立慶州博物館に所蔵されていることがわかった。さらに釜山避難期に金煥基が美術大学の学生を連れて慶州に出かけていたこと、くわえて別の西洋画家もまた当時の雑誌に挿画として同じ仏頭を描いていたこともわかった。そこで金煥基が描いた仏頭の実物を見ることと、なぜ朝鮮戦争期に韓国の画家たちが相次いでこの仏頭を描いたのかを考えることというふたつの目的のため、慶州で現地踏査と文献調査をおこなうことにした。

ウェブサイトでは
非掲載にしています。

金煥基《壊れた仏頭》1952年　紙・鉛筆　29×41㎝　煥基美術館
©煥基財団・煥基美術館
（出典：煥基美術館学芸室『WHANKI MUSEUM HIGHLIGHTS』煥基財団・煥基美術館、2019年）

慶州のベテラン水先案内人、タクシーの運転士さん

仏教文化が花開いた慶州は、統一新羅時代の仏国寺（ブルグクサ）と石窟庵の世界遺産で知られる観光名所である。慶州のタクシー会社のワンデイプランを予約し現地で待ち合わせると、目をつぶっても仏国寺へ運転できそうな年配のベテラン運転士さんに迎えられた。いつもの孤独な資料調査とは異なり、車内では慶州ことばによる観光案内がにぎやかで、同僚や家族からの着信をハンズフリーで受け「今お客さん乗せてっから！」と言いながらも続く雑談を聞くのも楽しい。この運転士さんのおかげでどんな小さな資料館も迷わず行くことができた。そしてどんなに辞退しても「これが仕事だから！」とすべての目的地の入口で記念写真を撮影してくれるのだった。

この現地踏査と関連資料調査を通じてわかったのは、新羅の都があった慶州は、近現代史においてもさまざまな文脈をもつ地であったということである。日本統治期、朝鮮総督府は植民地政策の一環として古跡調査をおこなったが、同時に密売目的の盗掘や破壊も進み、金煥基が描いた仏頭もまさにこの時期に盗掘犯がしかけた爆発物によって破壊されたものであった。しかし南北分断によって大韓民国が建国されると、南側の統一王朝であった新羅の歴史や文化が国民国家形成のシンボルとして用いられた。慶州にゆかりのある文学者たちが熱心に創作をおこなったが、その一方で朝鮮戦争が勃発すると再びさまざまな文化財が被害を受けた。朝鮮戦争期において金煥基とほかの画家たちがしばしばこの仏頭を画題としたのは、目まぐるしい社会変化に翻弄される朝鮮美術の運命を傷ついた仏の顔に映していたからといえるのかもしれない。

慶州滞在の最後に国立慶州博物館でこの仏頭の現在の姿を見た。それは日本統治期の写真や金煥基のドローイングで見た、地面に置かれ黒ずんだ頭だけの仏さまとは異なり、石肌が真っ白に洗われ本来の立ち姿の状態で胸の部分までが修復された巨大な胸部像であった。あまりに真新しく修復され衝撃的でもあったが、過去の辛い歴史をまったく思い起させない明るく堂々とした現在の姿にも胸を打つものがあった。

慶州を発（た）った後、お世話になった運転士さんからスマホにやけに重いデータが送られてきた。こわごわ開いてみると各所でのわたしの記念写真が動画仕立てになったものであった。ドラマチックな歌謡曲のBGMがつき、徐々に疲れ果てていく半笑いの自分をスライドショーで見ることができる。戦時下の美術調査に対する緊張をしばし忘れ、最後に大笑いして慶州の旅が終わった。

仏国寺天王門 四天王像（2019年）

画家の足跡をたどってみました

上：仏国寺紫霞門（2019年）
下：仏国寺回廊（2019年）

石窟庵の広場（2019年）

石造仏立像（修復後）　統一新羅時代　国立慶州博物館（2019年）

コレクションあれこれ

世界初の毛沢東バッジデータベース

韓 敏（ハン ミン） 民博 超域フィールド科学研究部

毛沢東の生家がある韶山郷にて、毛沢東バッジなどの土産品コーナーで聞き取り調査をおこなう筆者（右）。生家は1951年に革命記念地として一般公開された（撮影：韓春栄、湖南省韶山市、1994年）

バッジは本来、衣服の襟または胸の部分に付け、着用者の所属、資格、階級、功績等をあらわす徽章・記章のことである。毛沢東の肖像が入っているバッジは、文化大革命初期（一九六六～一九六九年）に集中的に中国大陸の各地で製造されたものである。毛沢東バッジの表面と裏面には、さまざまな文字や文様が施されている。

わたしが毛沢東バッジを研究のテーマにしたきっかけは、一九九四年から着目している現代中国における毛沢東観光に関する研究である。

中華人民共和国の建国の父である毛沢東は、一九八〇年代に中国政府により再評価され、国家をまとめる政治的象徴とされた。また、同時期に導入された社会主義市場経済によって、観光業者や毛氏一族と一般の村人が毛沢東をテーマとする観光産業に参入し、生家が聖地化されるなど、毛沢東のイメージはより多元化されている。このような毛沢東の象徴性に関する聞き取り調査のなかで、バッジが人びとの語りや生活のさまざまな場面によくあらわれることに気づいた。その後、バッジの入手ルートや使用状況、バッジにまつわる思い出などについて調査するようになった。

三〇億枚つくられた毛沢東バッジ

本コレクションは、わたしが二〇〇八年と二〇一〇年に遼寧（りょうねい）省瀋陽（しんよう）市、雲南（うんなん）省昆明（こんめい）市、安徽（あんき）省宿州（しゅくしゅう）市で調査したときに収集したものである。

毛沢東バッジは、文化大革命初期の中国において、地域や民族の範疇（はんちゅう）を超えた、国民的装身具となった。当時、瀋陽市で小学生だったわたしも、同級生のほとんどがバッジを胸に付けていたのを覚えている。バッジの着用率がいちばん高い一九六九年には、全人口の九四パーセントに達していた。当時、中国の各省、市、県、工場、政府機関、解放軍部隊、学校、民間組織が毛沢東バッジを製造していた。この時期に製造された毛沢東バッジの数は、三〇億枚に上ったといわれている。

胸にバッジを付けた小学生の記念写真（瀋陽中山広場、1969年、提供：H氏）

バッジ1：マンゴーバッジ（左、H0326604）
バッジ2：徐氏が職場から贈呈されたバッジ（下、H0326581）

バッジが語るストーリー

毛沢東バッジの存在は一般的に知られている一方、誰が何のために製造したのか、あるいはどのように入手して使用したのかは、十分に説明されていないのが現状である。本データベースはできるかぎりバッジの情報や使用状況を反映させるようにしている。

バッジ1の毛沢東の肖像の下にある皿に載っているのは果物のマンゴーである。一九六八年八月五日、毛沢東はパキスタン外相との会見の際にマンゴーをもらった。毛沢東は当時めずらしかったそのマンゴーを清華（せいか）大学に進駐したばかりの労働者毛沢東思想宣伝隊に贈り、宣伝隊を支持する態度を表明した。一方、毛沢東からマンゴーをもらった労働者たちはそのマンゴーを聖なるものとし、そして多くの人や次の世代の目にも触れることができるようにマンゴーを蠟（ろう）で封じて保存した。その後、実物サイズのプラスチックのマンゴーが複製され、各地の労働者宣伝隊に贈られた。このことを記念するため、各地でマンゴーバッジが製造されたのである。

バッジ2は通常のバッジよりサイズの大きい鉄製のものである。バッジの所有者である徐氏（じょし）は、文化大革命のころ、職場の労働模範として表彰された際に奨励品としてこのバッジが贈呈されたと筆者に語ってくれた。

文化大革命のころ、職場で労働模範として表彰された竹細工職人の徐氏（安徽省宿州市、2008年）

毛沢東グッズの買い取りと販売をしている店（雲南省昆明市、2008年）

日英中の多言語データベース

このように本データベースは、バッジの図案や文字についての解説と現地調査に基づいた詳細な関連情報を掲載しており、社会主義中国における国民的装身具の実態や歴史的背景と社会的状況に関する基本情報を提供することができる。また、日本語・英語・中国語による多言語での情報発信により、多くの国の研究者と一般の人びとに、中国の社会主義的近代化の暮らしに対する理解の手がかりを提供する世界初の毛沢東バッジデータベースといえる。

毛沢東バッジデータベース

資料点数：98点

この毛沢東バッジコレクションは、筆者が2008年と2010年に中国の遼寧省瀋陽市、安徽省宿州市、雲南省昆明市で収集したものである。98点のバッジは、1966～69年に中国大陸の各地で製造されたものであり、バッジの表裏にある文字や文様の情報、意味およびその時代背景について、日本語・英語・中国語の3言語で説明している。2022年6月からWEB公開中。

https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mzbadge/

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

シネ倶楽部M

ジョージア北東部における牧人と山岳民の暮らし

久岡加枝（ひさおかかえ）　民博 外来研究員

トゥシェティ地方の幾何学模様
（カヘティ州、ゼモ・アルヴァニ村、2011年）

山の斜面で草を食む羊たち（カヘティ州、オマロ村近郊、2011年）

「トゥシェティの牧人」

原題：თუში მეცხვარე
1976年／ジョージア（グルジア）／グルジア語／240分／DVDなし
監督：ソソ・チハイゼ
出演：イラクリ・ヒザニシュヴィリ、ラマズ・スラカウリほか

馬で山道を駆け抜ける青年たち
（カヘティ州、オマロ村、2011年）

わたしは一〇年以上前に、ジョージア（旧グルジア）のカヘティ州の北東部に位置するトゥシェティ地方を訪れた。ロシアのダゲスタン共和国とチェチェン共和国に接する山岳地帯のトゥシェティでは、古くから牧羊が営まれてきた。山岳民の生活に興味があったわたしは、北東部にルーツをもつ知人の伝手で、一カ月ほどトゥシェティの人びとと過ごすことになった。その際に「観てほしい」と勧められたのがこの映画だ。

山の頂への過酷な道のり

一九七六年に公開された「トゥシェティの牧人（ぼくじん）」は、ソソ・チハイゼ（一九三七～一九九二年）監督による長編映画だ。主人公以外の俳優にはトゥシェティの人びとが起用され、牧人たちの日常がありのままに描かれている。トゥシェティの牧人たちの村で、一年間働くことになった主人公のレクソは、母の心配をよそに数百頭もの羊の群れを引き連れて山に移動する。「道端で倒れているヒバリを見た者は、旅路で息絶えたトゥシェティの牧人のように哀れに思う」ということわざが物語るように、牧人の道のりは過酷なことで知られる。冬場はアゼルバイジャン国境付近のカヘティ州の平原まで羊を連れていき、雪解けが始まる五月ごろに北東部山岳のトゥシェティの山の頂まで羊を連れていく。五月の山道は雪が完全に解けておらず、雪崩に巻き込まれる危険もあり、牧人たちの旅は常に死と隣り合わせだ。映画のなかに登場する幼いズリコの父親も羊を連れていく最中に命を落としている。牧人たちは山のふもとから三日ほど歩いて、ようやく山の頂にたどり着く。そして電気もガスもない山の牧草地で夏の終わりまで羊を放牧させた後、雪が降る前の九月に山を後にする。

映画のなかでも牧人たちはカヘティの平原から山の頂を目指す。山へ向かう途中で羊を盗もうとする者があらわれるが、牧人たちは雪の山道を越えて、陽光が差す山の頂にたどり着く。

ソ連時代以降、トゥシェティの人びとの多くは山から下りて、便利な暮らしを求めてカヘティ州の村で暮らすようになった。しかし毎年七月末におこなわれる四世紀のセバステイアの殉教者・聖アテノゲネスの祭の時期になると、人びとは故郷の山を目指す。映画のなかにも山を目指す牧人たちが、幼いズリコに「ここがお前の故郷だ」と声をかける印象的な場面が登場する。最近ではほとんどの人が車に乗って山を目指すが、羊を連れて歩きながら険しい山道を登る牧人たちに、畏敬の念を抱く人も多い。

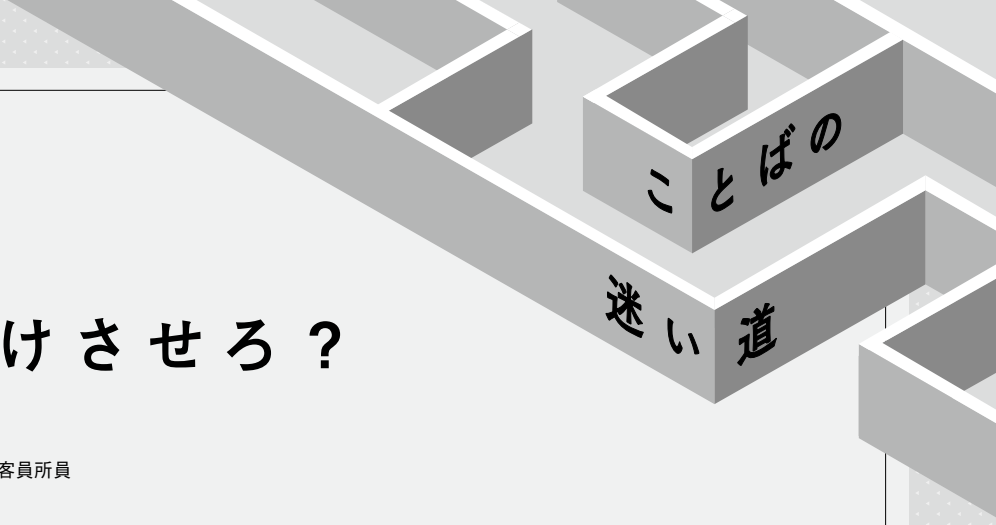
トゥシェティの暮らし

トゥシェティの人びとのあいだで、先祖たちが暮らしていた山は聖なる場所だとみなされている。山の頂にやって来た人びとは、野牛の角の杯に酒を注ぎ、山で命を落とした牧人たちに祈りを捧（ささ）げる。山ではジョージアの他地域とは異なり、ワインを飲む習慣がなく、自家製の黒ビールや蒸留酒が振る舞われる。トゥシェティの人びとは正教徒であるが、何故か山にやって来ると豚肉を食べようとしない。映画のなかにも、山の頂にやって来た牧人たちが、祝祭日の宴に加わり、石造りの祠（ほこら）の前で、蒸留酒やビールが入った杯を掲げて祈りを捧げる場面が登場する。宴もたけなわになると、老若男女がアコーディオンの旋律とともに歌い踊りはじめる。現在でもおなじみのトゥシェティの光景だ。宴が終わると、レクソは再び都会の日常に戻り、ズリコは山の寄宿学校に身を寄せる。

映画では男性の生活に焦点が当てられるが、トゥシェティでは古くから羊毛を使った靴下や絨毯（じゅうたん）の製作は女性によっておこなわれてきた。他地域には見られない幾何学模様があしらわれた靴下や絨毯は、ジョージア全域でよく知られた存在だ。トゥシェティの羊毛は、ジョージアで生産される羊毛の八割以上を占める。その頑丈な毛は、ソ連時代には兵士の服に用いられていた。ソ連崩壊後のジョージアでは、羊毛を国外に輸出しようとする動きもあったが、粗いトゥシェティの羊毛は、ヨーロッパでは不評だ。しかしながら最近ではカヘティ州の羊毛加工企業が奮闘し、年々増えつつあるトゥシェティを訪れる国外からの観光客を対象にあらたなビジネスを展開している。

靴下を履いて踊る少女たち。お洒落は足元から
（カヘティ州、ゼモ・アルヴァニ村、2011年）

羊毛製の部屋履き。毛染には化学染料の他、ヤマハッカなどの天然素材も用いられる（2022年）



耳を怠けさせろ？

林（はやし） 明仁（あきひと）
上智大学アジア文化研究所客員所員

仕事で東南アジアに住んで8年が過ぎようとしている。まずラオスに6年強、そして現在カンボジアに住んで2年が経（た）つ。ラオスとカンボジアは東南アジアの小国であり、隣国である。日本人の多くは、この2つの国と接点のないままに人生を過ごすだろう。かろうじて一部の人は「アンコール・ワットに行きたい」という理由でカンボジアに来るかもしれない。そんな事情を反映してか、海外旅行をする人であれば誰しもが購入したか購入を検討したであろう『地球の歩き方』（ダイヤモンド・ビッグ社）のカンボジア版だけ、タイトルが『アンコール・ワットとカンボジア』となっている。通常、ガイドブックのタイトルは国名であるにもかかわらず、だ。ラオスにいたっては、村上春樹が『ラオスにいったい何があるというんですか？』（文藝春秋）という本まで出してしまった。

こんな2つの国のことばは、似ているようで似ていないなんとももどかしい関係になっている。2つのことばは、語族は異なるのに文字の系統が同じなのだ。ラオス語をなんとか読めるようになっていたわたしはカンボジアに来た当初、「なんとなく文字も似ているし、ちょっと勉強したら大丈夫」と考えていた。しかし、現実は甘くなかった。まず、たしかに文字の作り方は似ているが、かなり複雑だった。子音の数も母音の数もクメール語の方が多い。しかも、同じ母音の文字を使っても子音の種類によって発音が変わってくる。文字を覚えるモチベーションは一瞬で喪失した。

発音も難しかった。ラオス語と比べると子音連続や二重母音をもつ単語の数が多いように感じる。声帯を緊張させない弛喉（しこう）母音というものもあるらしい。音のもつ雰囲気がベトナム語に近いと思ったので、カンボジア人の同僚たちに伝えたら、「全然近くない。タイ語の方がかなり近い」と一蹴された。言語学的な分類では、クメール語とベトナム語が同じ語族でラオス語とタイ語が同じ語族なのだそうだが、言語学者は人びとの実感と言語学的な分類の乖離（かいり）をどう整理しているのだろうか。

ところで、カンボジアではラオスと比べて英語が通じる。しかも、流暢（りゅうちょう）な英語に聞こえる。しかし、住み始めてしばらく経ったときに気になったことがある。わたしの英語が通じないときがよくあるのだ。相手は滑らかな英語でしゃべっているのに、わたしがしゃべると「？？」という顔をする。そして気づいた。カンボジア人は耳がよすぎるのではないかと。クメール語が複雑な発音の体系をもつためにわずかな発音の違いも大きな違いと認識してしまうことで、わたしのジャパニーズイングリッシュが理解できないのではないかと。

この疑問をプノンペン大学外国語学部卒業の同僚にぶつけてみた。返事は「そのとおりだと思う」だった。カンボジア人の英語を聞いたときは、発音が滑らかなのでうらやましいと思ったが、現実には彼らなりの難しさを抱えて英語を勉強しているのだ。日本人が英語を学ぶときには耳を鍛えないといけないと言われる。カンボジアでは、耳を怠けさせろと教えられるのだろうか。今度聞いてみたい。

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2022年12月号

第46巻第12号通巻第543号　2022年12月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　中川理　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678　VEGETABLE OIL INK　GREEN PRINTING JFPI P-810282

月刊みんぱく

2022年
12月号

編集後記

かつて、里の石には因縁があるから拾わないほうがいいと聞いたことがある。そのことはずっと記憶の奥にひっかかっていたが、今号の特集を読んでやっと腑（ふ）に落ちた。「いわ」には人の精神が反映されていて、何かをまとったものだからだ。

このように「いわ」をはじめとする具象的なものに意味を与える文化に対し、そういった物的存在に心のよりどころを求めない文化もある。具象的なものではなく抽象的な概念が人の精神の核になることは、宗教の違いにもあらわれるのだろう。イスラームは砂漠がほとんどのアラビア半島からはじまった。西アフリカのマリにあるジェンネのモスクは泥をこねて造る。サヘル地帯のセネガルではムスリムの墓に墓石はない。石のメタファーをもち、堅強な石を積み上げて建設したキリスト教会とは対照的である。

「いわ」に対する思いと、「いわ」がない世界の観念は、文化の多様性などといった概念で理解できるものなのか、あらためて考えさせられた。（三島禎子）

次号の予告 1月号

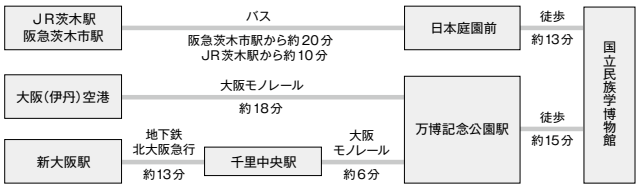
特集「パンデミックと世界の芸能」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

２０２３年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

海のくらしアート

東南アジアとオセアニアの漁具・舟具・儀礼用具

2023 年の国立民族学博物館オリジナルカレンダーは、企画展「海のくらしアート展 ── モノからみる東南アジアとオセアニア」の展示資料から選びました。海のくらしから生まれたモノの魅力を一年をとおしてお楽しみください。

企画展「海のくらしアート展
── モノからみる東南アジアとオセアニア」

会期：2022 年 9 月 8 日 (木) ～ 12 月 13 日 (火)
場所：本館企画展示場

定価 1,430 円〈税込〉

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,287 円〈税込〉

サイズ　25cm × 25cm（開くとタテ 50cm ×ヨコ 25cm）
オールカラー 28 頁 中綴じ

◆ 5 冊以上まとめてご購入の場合は、1 冊 1,144 円〈税込〉です。
◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ　E-mail shop@senri-f.or.jp　10:00～17:00　水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」　https://www.senri-f.or.jp/shop/

オンラインショップ